

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 18 日

所 属：生命・環境科学部 学科

氏 名： 江口 祐輔 職位：教授

役 職：フィールドワークセンター長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）
（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。

2021年度に開設されたフィールドワークセンター長として、大学初となるサテライトキャンパスの運営を担っている。地域の課題と問題（動物との共生、獣害対策、地域の資源を活用した地域づくり）を研究と地域住民の実践による連携を身につけるフィールドワーク教育を行う。授業は、環境野生動物学、野生動物共生学、環境生態学やオムニバス担当授業を担当する。本学へのリモート講義、本学に出向いての講義を行う。また、フィールドワークセンターにおける集中的な実習・研究のコーディネート、動物行動学、獣害対策分野を中心とした卒論、修論の研究指導を行なっている。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
環境野生動物学	環境科学科	自	2	6
野生動物共生学	環境科学科	自	3	3
地球共生論	全学科	必	1	513
地球環境科学（1コマ）	環境科学科	必	1	69
生物多様性フィールドワーク演習	環境科学科	選	3	19
環境生命科学（2コマ）	環境科学科	選	2	54
環境生態学（4コマ）	環境科学科	必	1	78
応用動物行動学（1コマ）	動物応用科学科	必	2	134
科学技術英語	環境科学科	選	3	1
リサーチローテーション	環境科学科	必	2	70

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信

念、価値、目指すもの)

野生動物行動学および生態学を通して学生に自然科学だけでなく社会科学に対する興味を持たせ、学ぶ喜びや探究心を養い、環境保全やヒトと動物の共存などの社会的要請に応えられる広い視野を持った人材として社会へ巣立ってほしい。そのために、環境・動物・健康の専門分野を修学し、さらに、視野の広いジェネラリストとして役立つ人材を育てたい。

自ら考え・動くことのできる人材を育成するために、理解の促進と学びの定着を図り、あらゆる学びの場面で主体性を持たせるようにする。また、現場において様々な立場からの意見に触れることで多角的視点を持つことを習慣づけ、問題解決力を身につけられるよう考え、試行錯誤できる環境を与える。問題の本質を見極め、あるべき姿（ゴール）に到達するために必要なプロセスを設定できる能力を身につけるようにする。そのためには、常に対象の動物や他者の視点にからも物事を見つめることによって問題を理解できるようになってほしい。これらを養うために、特にゼミナールや研究室活動、地域活動を通じて、様々な背景を有する人々と触れ合い、広い視野を持ちながら多角的視点で物事を思考できる環境を提供する。

動物行動学を主としながらもその周辺分野についても理解を深めることで知識の裾野が広がり、より専門領域の発展性や応用性を高めることができる。「広い裾野なしに大山なし」を意識しながら、野生動物管理学・共生学分野での実践的ジェネラリストに必要な基礎知識と技能、思考力、分析力、判断力、表現力を講義・実習、卒業研究を通じて養い、さらには学生が現場の環境や住民の生活を肌で感じながら人と動物の軋轢に対する問題を発見し適切な解決方法を導く研究テーマを見出し実践できるようプログラムを提供したい。将来、研究者を目指す学生には、アカデミックに没頭するとそれ自体が特別なもの、高貴なものと勘違いする落とし穴にハマらないようにしたい。アカデミックは、幸せなLIFEを作るものであることを常に意識できるようになってもらいたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）

講義に対する興味や好奇心を刺激できるよう、動画を利用して視覚的にイメージを定着させた上で、理論を説明する講義を行う。見易さ・理解し易さを重視し、学びの定着を図るため、学生自身のこれまでの経験や興味、共感できる内容と関連させながら新たな事柄を理解させることを心がけている。また、考える習慣を身につけてもらうため、講義中の口調は「伝える」だけでなく、学生へ「問いかけ」ながら講義を進行させることを心がけている。

講義科目に対して比較的興味が薄い学生もいるので、他の分野との関連性や、この分野を学ぶことで将来的に役立つメリットを伝えるようにしている。

フィールドワークによる、現場の問題解決能力の育成や研究スキルに関する教育については、地域環境や住民の意識を把握することから地域の問題を設定し、解決する手法を導くまでを実践できるようなカリキュラムを提供する。

過去の研究成果や地域の活動事例を理解し、将来のあり方について積極的に議論できようになってほしい。

フィールドワークセンターで卒業研究や大学院の研究を実施する学生には

基礎と応用の垣根なく、フィールドワークや実験的研究と現場対応を融合させた、問題の発見から解決手法の開発そして現場での実装までを意識した実践的研究手法を学べるカ

リキュラムを提供したい。

アクティブラーニングについての取組

大人数を対象とした講義では、オンデマンド式に加えて毎回の理解度確認や各自の意見を求める小テストを実施することで、学生の主体的な学びを誘導できると考えている。また、フィールドワークセンターにおける実習では地域自治体、企業と協力し実践的な実習を行なっている。

ICTの教育への活用

理解を深めるため、研究活動の動画を利用した講義を行う。

LMSを利用して講義後に理解度を確保するための小テストを定期的実施している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

B:課題として出しているレポートを見ると、十分にこちらの意図を理解できていない学生も見受けられる。自分で思考するより、文献に頼りすぎる傾向が認められる。考える機会を与えることで、理解度を上げてゆきたい。

②学生の理解度の把握（A～C）

B:講義に関しては確認テスト行っているが理解度を十分に把握できているとまではいかない。実習については少人数の選択実習を担当しているの、把握できている。

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

C:学生によって取り組みに大きなばらつきがある。自学自習を促進させるための取り組みを考えていきたい。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

B:メールや Google Meet、対面式等によりできる限り対応している。LMSの扱いに慣れてきたが、複数LMS扱岩蹴るのに手間がかかってしまった。

⑤双方向授業への工夫（A～C）

B:対面授業では対応できているが、リモート・オンデマンド授業では難しいのが現状。リモート等でも可能な双方向授業のあり方を学びたい。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

②①の結果はどうでしたか。

③②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

担当科目が自由科目で履修者が少ないため、授業評価を実施していない科目がある。次年度から選択科目に変更されるので、履修者も増える見込みであり、今後の授業評価の結果を反映させたい。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

成績の向上につながる思考技術と理解力の向上を目指して、知識の伝達だけでなく、多様な考え方について頻繁に授業中で紹介している。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生はフィールドワークを現地で活動するという抽象的なイメージのしか持たない場合が多いので、フィールドワークのあり方をより明確に理解できるように、さまざまなテーマについて意見交換をする機会を研究室活動として実施する。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

積極的な参加を心がけているが、対面のFDに参加できないことがほとんどで苦勞している。教育・研究倫理の質の向上に役立った。今後も積極的にFD活動に参加していきたい。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

フィールドワークセンターにおける体験型の講義・実習をカリキュラムに導入したい。L学部では学科を跨いだ総合的な実習とし、フィールドワークや地域づくりの全体像を理解しながら専門性を伸ばすカリキュラムを構築したい。

また、高度なリモート実習・演習システムを開発していきたい。野生動物の実際の生息環境を体験的に学ぶことが望ましいが、大人数が一堂に現場に入ると、環境を攪乱する可能性もある。一方、野生動物の細かい痕跡は、写真や動画では肉眼で見える奥行きを表現できないため直感的に理解することが難しい。そこで、技術成長が著しい、映像・通信技術を融合し、教室にいながら、生きた自然の教材をリモートで体験することができる映像システムを目指したい。

麻布大学を含む美郷町の産官学民の連携構想の美郷バレーを十分に利用し、実践的なアントレプレナー教育を取り入れたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

シラバス

配布資料

授業評価